

鳩という漢字が鳥よりやさしいのは、それが目に見える実在を表わした字だからです。幼児は、そのまま丸呑みするので、言い換えますと、具体的なものほど覚えやすく、抽象的なものほどむずかしいのです。

「鳥」という鳥や、「魚」という魚は存在しません。実在するのは、鳩であり鷹であり鶴です。鯉であり鮒です。それなのにそれをすべて鳥とか魚というから混乱してしまうのです。

鳩だったら最初から「これは鳩よ」と、鯉だったら「これは鯉よ」と教えるべきです。そうすれば幼児はすぐに覚えるはずです。

鳩や鷹や鶴をまず覚えます。これらを覚えたら、これらには「羽があって、嘴があって、足が二本」など、いくつかの共通項があることに気がつきます。

ここで初めて「鳥」という概念が理解できるようになるのです。こうして、ものをまとめたり、分類したりする習慣が自然とついてくるのです。これは、後に学校で学ぶ「集合」の学習にも大いに役立つことになります。

こういうふうになんかを覚えていくと、全然知らない鶯や鶯という複雑な字を見ても、それらが「鳥の仲間」ということはすぐわかるようになります。これは推理する力や、想像力、判断力などが向上してくるからです。

元来、文字というのは、耳で聞く言葉を目でとらえるようにしたものです。言葉を耳だけでなく、同時に目でもとらえることによって、理解しやすくなります。

これはアメリカの実験なのですが、耳だけで学習することと、目だけで学習すること、そして目と耳を両方使って学習することの学習効果を比較してみると、なんと1対2対6.5という結果が出ました。

たとえば「手を洗う」ということを教えるときでも、ただ「食事の前には手を洗いましょうね」と耳に訴えるだけでなく、「手を洗う」と書いて見せるべきです。

そうすれば字を覚えるのと一緒に、その事柄がよくわかって記憶され、生活の中でも生かされてきます。漢字で書けるものは、何でも漢字で書くようにして教えてやると、理解力が違ってくるのです。